

# 栽培現場への研究情報の伝道士不足

久保田 芳久

（株）坂田種苗（現株）サカタのタネ）に入社し、40年栽培現場を見てきた中、様々な出会いと経験をさせていただきました。

その中で、農家が営む農業技術（農業習慣）と研究部門の発見などのかい離がかなりあり、その距離は埋まらず、さらに開いたように思います。足りないのは、教祖ではなく伝道者の数です。

今年の花葉会セミナーでのシクラメン農家見学会で、葉柄を潰しての養分分析法が紹介されました。研究確立が遅れたのではなく、この手法が農村に未だに入っていない事に問題があります。そして当日参加の普及員によると普及所にある高温対策は、気温を下げる事しかないのです。

自分はトルコギキョウで35年産地づくりをしてきましたが、高温時や低日照期の化学肥料は害になり、アミノ酸系肥料が救いとなりました。20世紀中の研究で空中窒素固定細菌のアミノ酸分泌が明らかにされたにもかかわらず、農村部では県の普及部門も含め、19世紀のアンモニアと硝酸態チッソのチッソ成分2点のみの思考領域を出ません。

学生時代の霧ヶ峰の監視員、尾瀬での自然解説員などの経験から、あれらの植物は微生物と共生して養分を得ている事に肌で感じました。トルコギキョウもこの典型で、日本のトップグロアーはここを実践しています。21世紀のこの時点でもまだこの情報を受け入れられない産地（県）は、残念ながら栽培面積が縮小しています。

花の世界は野菜の世界と異なる分野（山野草）があり、また原産地からの歴史が浅い植物も花卉園芸に使われています。

トルコギキョウなど歴史が浅い植物は、種内競合も含め、アレロパシーを意識する必要があります。しかし、この研究は園芸学会ではなく、生物学のアレロパシー学会に属します。トルコギキョウでの、この発見と対策を理解した農村部はまだ半分に満たないでしょう。この伝道は自分の仕事と思いますが、自分の非力にも要因があるでしょうが、まだ理解を十分に得られていないのが実情です。

微生物利用となると、栽培技術部門からは歓迎よりも反発があります。しかし土壌病害処理で、バチルス菌、乳酸菌、放線菌の優良株があり、この3種の菌の連続処理で病害防除ができるまでになってきました。生物を使うので、その環境整備、使用技術、ご機嫌取りは必要ですが、「どうすれば働いてくれるか」は確立されています。この伝道は力が要り楽ではなく、伝道者の数が必要ですが、現状は少人数に限られています。

他にも伝道の足りない項目は多数ありますが、農村部からの距離は縮まりません。

ここで若者への提言、あなたが伝道士になる事もまたあなたが必要とされる道です。

## 花葉

2015  
NO.34

## 目次

禁無断転載

私の提案 栽培現場への研究情報の伝道士不足	久保田芳久 (1)
商業的花卉育種を概観する；実情、問題点、将来展望	羽毛田智明 (2)
東アジア (ASEAN諸国) における品種保護制度の最新状況	石川 君子 (7)
カリフォルニア・スプリングフラワートライアルツアーを企画して	金澤 美浩 (10)
高知で蘭作りゆうよ	森尾大次郎 (14)
林脩己先生のこと②	小泉 力 (18)
浅山英一先生が見出したストック品種の遺伝子を活用した黒川さん父子の育種の大きな成果	林 角郎 (23)
表紙解説 ロサ・ペルシカ	長岡 求 (27)
自叙伝抜粋 庭の花材あれこれ	花岡 喜重 (28)
花葉会海外園芸事情調査報告 「平成27年度花葉会海外ツアー カザフスタン」に参加して	高野 恵子 (32)
追悼 小田善一郎さんを追悼して	村井 千里 (38)
第30回花葉会セミナーレポート	上原 恵美 (40)
花卉園芸学研究室レポート (松戸キャンパス) 松戸花卉研で過ごした日々とこれから	徳本 翔子 (45)
花卉園芸学研究室レポート (柏の葉キャンパス) 多様な価値観の交わりの中で	渡辺 史 (46)
園芸別科花組レポート 花と向き合う2年間	大下 翔平 (47)
花葉会の法人化について その目的と経過報告	田中 桃三 (58)
花葉会総会 (48) 渡辺重吉郎先生の長寿を祝う会 (51) 会員名簿の追加と訂正 (52)	
花葉会会員近況報告 (53) 一般社団法人 花葉会定款 要綱・幹部会員名簿 (59)	